My Thesis（私の学位論文）

医歯薬学研究部 口腔保健福祉学分野　吉岡　昌美

Morioka, M., Kido, R., Hinode, D., Nagata, A., Sato, M. and Nakamura, R.

Adhesion of *Porphyromonas gingivalis* to human gingival fibroblasts and collagen

（ポルフィロモナス・ジンジバリスのヒト歯肉線維芽細胞及びコラーゲンに対する接着について）

J. Dent. Health, vol.42, p23-34, 1992　本文へのリンク

森岡昌美，木戸玲子，永田篤司，日野出大輔，一宮斉子，佐藤　誠，中村　亮

Porphyromonas gingivalis **のヒト培養歯肉線維芽細胞に対する細胞毒性について**

口腔衛生学会雑誌 第 42 巻 p184-190, 1992 年　本文へのリンク

私は昭和 63 年 4 月に当時の歯学部予防歯科学講座に大学院生として入局しました。私が予防歯科学を選択した理由の一つは、地域保健や公衆衛生に興味があったからですが、指導教授の中村亮先生からフィールドワークで学位を取ることは難しいというご指摘を受け、当時予防歯科学講座の主な研究テーマである『歯周病原性細菌の病原因子に関する基礎研究』を行うことになりました。中村先生からは「君は試験管を振るのが好きか？それとも解剖が好きか？」と問われました。その意味するところは「機能系」か「形態系」かということであったのですが、私は学部学生の時から学問としてビジュアル的にイメージしやすい解剖学に親近感を持っていたので、「試験管はあんまり振ったことがないのでわかりませんが、解剖学には興味があります」と答えました。それを受けて、私は当時歯肉の培養細胞を用いて実験を始められていた木戸玲子先生に弟子入りすることになりました。木戸先生には、実験ノートの書き方のイロハを教えて頂きました。また遠心分離機を回している合間の時間には英文の論文を読むというかなり充実した大学院生活を送らせていただきました。スローペースで要領の悪い私にとって、最初の 1，2 か月はかなりきつかったですが、先生に教えて頂いた実験のイロハは今でも、私の研究者としての芯棒となっていると思います。特に、大学院時代の実験ノートは 20 年以上経った今でも私の宝物で、後輩や大学院生に何かを尋ねられた時には、それをめくることさえあるのです。私の学位論文のテーマは、『歯周病原性細菌』と『細胞間質』と『宿主細胞』の三角関係を調べることでした。木戸先生には、折に触れ、それを模式図として説明していただいたことを覚えています。もう一つ、木戸先生には、「大学院の前半 2 年間は、あくまでもトレーニング期間。学位論文に直結しなくても、大事なことだからね。」というようなことをよく言われました。最近の若い世代は、「結果につながらないことを“無駄”とみなし、余分なことはしたがらない」風潮があるように思います。当時の私にしても、やはり、「早く学位論文につながる仕事をしたい。できるだけ早くメドをつけたい。」と焦る気持ちもありました。しかし、今となっては、その時、学位論文につながる仕事しかしていなかったとしたら、紆余曲折した経験がなかったとしたら、おそらく、何か壁にぶつかったときに、粘り強く立ち向かう根性が培われていなかったように思います。本当に木戸先生には感謝です。今後、私が学部学生や大学院生の研究指導を行うときには、できるだけ、その研究のストーリーを図式化して、その研究の面白みを理解して取り組んでもらえるように指導していきたいと思っています。大学で、研究できることは、本当に恵まれていることと思います。学生さんや若手研究者の皆様には、是非、自分の間口を広く持って、指導教員はもちろん先輩や周りの人の知恵も頂きつつ、自分の目指すところに向かって、日々精進していただくようお願いしたいと思います。